

二次元ぷち文庫

# ツインズ プリンセス

～淫辱の闘技場～



表紙イラスト：日之下あかめ

試し読み版

武猛

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『ツインズプリンセス 淫辱の闘技場』  
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



# ツインズ プリンセス

～淫辱の闘技場～

武猛

表紙 日之下あかめ

二次元ぷち文庫

# 登場人物紹介

Characters

---

## マリス・アシェス

アルシア王国の姉姫。赤い甲冑を纏い、女性らしい肉体の魅力に溢れる。大剣を扱う。

## ティリア・アシェス

アルシア王国の妹姫。青い甲冑を纏う。コロシウムでの戦闘に興味を持っている。

「んん……んくっ、んううんっ！」

この大地が太陽の支配から闇の支配に変わり、ほのかな月明かりが寝室を照らす。屋根付きで透けたカーテンのベッドの中で美しき金の髪を煌めかせ、絹のように白い肌が汗ばんだ美少女が横になつて眠っているが、眉を顰めて身悶えていた。意識は寝ているのだが、夢の中に浮かび上がるビジョンに同調して身体をくねらす。

相手の顔や肉体は見えないが、数多くの手が全裸で手足は枷をされて身動きできない彼女を襲い、肢体を捏ねくり弄つてくる。

「はああつ、あううう、……んくううつ、はうううつ！」

群がつて弄り回す多数の手は、身体を埋め尽くして豊満な乳房を揉みしだいたり、内太腿を擦り、ピンクから赤みがかつた花卉の周辺を撫でられ花蜜が溢れ出てくると、少女は悦びの声を挙げる。

「はうううつ！ か、身体中がつ、……む、胸もあそこもいつぱい、いじられてえ……、凄く気持ちいいのおおつ！」

夢の中だというのに実体があちこち触られたかのように、身体の芯から熱を発して悦楽を感じ、花びらの奥から蜜を漏らしていた。

「ひいいいんっ、いいつ、もつと、……もつとしてえええつ！」

ついに多くの手が花卉を開き、何本もの指が秘肉を掻き回すと湧き上がる快感をねだる。

（私いつ、こ、こんなことつ、望んでいないのに……どうしてなの？）

快楽に抵抗する自分と素直に受け入れるもう一人の自分。夢の中の思いとは裏腹に、多数の手に触られるがままにされて自然に腰を振っていく。それだけで次第に興奮して、極みに高まろうとしていた。

「ああつ、来る来るつ、キチャウウつ！」

手足はジタバタできなかつたが、全身を震わせ腰を突き上げて指を求めたとき。

「だめええええええええつ！」

ハッと目を開いてガバツと急にシーツごと上半身を起こし、胸を上下させ息を荒く呼吸を繰り返す。

「はあ、はあ、はあ……。今のは夢？ それとも……」

純白なシルクのネグリジエは汗で濡れて透け、ふくよかな胸や薄い桃色の乳首が浮かび上がる。実際には自らでは弄っていなかったが、夢の影響なのか身体は熱く、激しい鼓動と一緒に量感のある豊乳は揺れ、秘部からは漏らしたように多量の花蜜がベッドのシーツをびっしょり汚していた。

「あ……やだ、こ、こんなになつてる……」

彼女はシーツのシミの広がりを見て顔をかあつと赤くする。夢の中で受けた秘園への痺れた感触を、同じ姿をしたもう一人の自分も受けていたことを思い出す。名残惜しそうに

手を伸ばそうとするが、我を取り戻してピタッと止めた。

(わ、私、何を……?)

無意識で自慰に浸ろうとしたことを恥じ、深呼吸して落ち着いた後に窓から差す月の光のほうへ視線を移す。

「テイリア、あなたは一体何処にいるの……」

双子の姉、マリスは窓の先の夜空を眺めながら、今ここに居ない妹のことを想う。

アルシア王国は古来より繁栄し、国土を維持してきた由緒ある国家である。ここ近年ではまだ成人に満たない二人の姫が戦場の前線に立ち、横幅が広く彼女達の身長より二倍以上の長さがあるソードを軽々と振り回し、金色の髪を煌めかせて兵士達を導いたという。それからアルシアの双子姫の勇ましくも美しい姿は民衆の憧れとなり、遙か遠くの地にまでその名は轟いていた。

髪は肩甲骨にまですらつと伸びている金色。身長は一般女性と平均的だが、きめ細かい白い肌。柳眉と目鼻は整っており、線の細い体型に零れんばかりの豊満な胸と締まりのある腰つき。

衣装は純白で袖はなく、首から下を覆い隠して胸元は見えないが、歩くだけで豊乳は揺れ、軽く動くだけで下着が見えるほどの丈の短いスカートをひらめかす。

それが一人だけでなく、全く同じような可愛らしい容貌が二人並んでいるのだから、人前に出れば誰もが見惚れてしまうだろう。

姉マリス・アシエスと妹ティリア・アシエスは日頃から仲が良く、起きてから寝るまで常に一緒に過ごし、別々に離れたり喧嘩したりなどの様子を臣下達は見たことがないほど。だがいつもなら姉の横で枕を並べて寝ているはずの妹の姿は今ここにはない。

妹が居なくなる以前、二人はこの地より離れた都市について話したことがあった。

アルシアの国境より西側にあるマーキ・ラ・スレーという都市は砂漠の中にあり、城のように聳え建つ外壁で街を囲んでいる。元々は商人達が集まって市場を開いていたのが始まりであり、長い年月を経て商業都市となった。今では人種・種族を問わず自由に出入りできるため自由都市と言われている。しかも一つの国家並の軍事を誇り、一国が攻め込んでも遥かに高い外壁で耐え、たちまち敵を追い払ってしまう。いわばこの都市そのものが一つの国家である。

この都市は商業だけでなくコロシウムでも集客を行う。そこで人間同士の一对一の格闘や、人間と魔物とを闘わせ、それを見せることで毎日人だかりができるという。

同じ滑らかなネグリジエを着たマリスとティリアはベッドに腰掛けて、その自由都市にある噂を耳にして話を交わした。各国首脳陣が集まって奴隷売買の禁止条項を決めたのだが、その後でも自由都市マーキ・ラ・スレーだけは裏で奴隷の取引をしていると聞く。



「姉様、自由都市での裏取引のこと、本当なのかしら？」

「それが真実としたら許せないことだけど、確証がないわ」

「それもそうねとテイリアは両腕を抱えて考え込み、しばしの間静かになる。

「それと、姉様は自由都市で行われていることを知ってる？」

「何のこと？」

眉間に皺を寄せ、首を傾げるマリス。

「コロシアムのバトルのことよ。あそこで是非闘ってみたいものだわあ」

姉と姿形がそっくりのテイリアは、両手に力を入れて瞳を輝かす。

「ああ、コロシアムね。私も興味はあるけど、私達の立場では当然出場できるわけがないわ」

「そうよねえ、残念だわ……」

姉は感情を顔に出さずに冷静に答え、妹は頭を垂れて溜め息をつく。

「テイリア。あなたは本当は奴隷制度のことより、コロシアムのバトルのほうが気になるの  
でしょう？」

マリスは見透かしたように、じいっと向かいに座るテイリアを睨む。

「そ、そんなことないわ、姉様。奴隷制度のことも大事なことよ、うん」

姉に言い迫られ、少し身を後ろへ下げて引きつった笑顔を見せる妹。

「まあいいわ。わかっていると思うけど、私達は普通の人達とは違うのだから、暴れるの

は戦場だけにしておきなさい」

窘めるように言い聞かすと、少し頬を膨らませながらもティリアは「は〜い」と返答し、それ以上その話題は続かなかった。

その後間もなく一つのベッドに横になる二人。マリスは床に付くが、妹の一言が気になっていた。ティリアには注意をして自らの冷静さを装っていたが、己自身も純粹にコロシムには興味があった。しばらくそう考えていると妹同様、闘争本能に火が付いてしばらく眠れなかった。

それから二日後。いつもと同じようにマリスは目を覚ますと、隣に寝ているはずのティリアの姿がないことに気付く。先に起きて湯浴みか何かしているのだろうと思ったのだが、探しても見当たらない。

「ティリア、何処に居るの？」

姉は城内を探し回り、次第に付き人や周りの人々も騒ぎ始める。妹が残した手掛かりは全くなく、前日に誰かと面会していたとの話を聞くも、それが誰かは誰もわからずじま이었다。

いつも妹と一緒にいたため、一人になってしまうと孤独感を覚えるマリス。

(ティリアがいなくて、こんなに不安になってしまおうと孤独感を覚えるマリス……)

結局その日ティリアは見つからず、このことを他国に知られてはならないと王宮内だけ

に留めておくことになった。

妹のティリアが消息を絶つて一週間後。それから姉姫の夢枕には毎夜淫夢が訪れ、しかも日に日に夢の映像がはつきりとしてくる。淫らな夢は日を追う毎に過激になってゆくが、行為を受けているのは自分と同じ姿体格のもう一人の自分であった。夜中マリスは汗を掻きながら夢から覚めると、陰部から蜜を零していたことに気付く。

(もしかしてこれは願望ではなく、ティリアに何かあったことを伝えているのでは……) 一国の姫といえども年頃の少女であり、人並の性欲ぐらいはある。だが連日淫夢に苛まれることは初めてだ。今何所にいるかわからない妹が、姉に助けを求めているのではないだろうか。

そう彼女の心に確信めいたものが湧くと居ても立ってもいられなくなった。フード付きのマントと鎧を着け、その下にはベルトだけでしゃがめば下着が見えるほどのミニスカートをひらめかせて大剣を手にする。鞆をギュッと強く握って決意を固めた後、側近の者に妹を探しに行くと言え、太陽がまだ昇らぬうちに王宮を出て行った。

だがたった一人ではティリアに関する情報がわからないため、アルシア郊外の宿屋である男と待ち合わせる。丸坊主で背が高く肌は褐色で筋肉隆々な姿はアロン・マキシモとい、冒険者ギルドのリーダーを務めている。彼は情報通であり、これまでアルシア国外に

出るときにもよく情報を貰っていた。

早速彼が得た情報を聞いてみると。

「旅人からの話ですと、数日前に金髪で大きな剣を持った女の子が、自由都市へ向かったらしいということですよ」

「はあ……、やっぱりそうだったのね。何も言わないで出て行くなんて……自分の立場を考えてほしいものだわ」

姉は深く息を吐いた後、口をへの字にして妹の行動に呆れていた。彼女を早く連れ帰らねばならない。居所がはつきりしたことと少し心配を緩ませながら、翌日、マリスはアロソと共に自由都市へ向かっていった。

それから五日後。昼は情報収集をしながら自由都市へと歩みを進めるも、夜は眠ると連日淫らな夢を見てしまう。悪夢を見たくない頭を振る寝不足の日々が続いた。

その日の昼間に砂漠の街道をひたすら進むと、高く聳えた赤茶色の大きな外壁が見えてくる。二人は門を潜り、コロシム周辺で近くにいた一般人達に早速ティリアの情報聞き出す。

「二週間前に突然藍色のブレストメイルに長剣を持った少女が舞台上に上がって、豪快に剣を振り回して勝ちまくっていたなあ」

「あれは間違ひなくアルシアの妹姪だと思うが、彼女の闘いを見たいために毎日通つたよ。でも四、五日前に突然彼女の姿を見なくなつたんだよなあ」

彼等は残念そうにべらべらと喋つていた。

(コロシラムで闘つていたのは間違ひないようね。でも、ティリアがいなくなつたつてどういうこと……?)

妹がここに来て闘つていたという確証は得たが、消息を絶つたことに疑問に思う。続けて彼女に会うため、直接コロシラムの受付へ乗り込んで問いただしてみても、「四、五日前からコロシラムには登場しておらず、以降の行方は知らない」と毅然な態度で全く相手にされなかつた。

その夜、マリスとアロンはその近くで宿を取つて話し合う。

「ふうう、ティリアの手掛かりはわからず仕舞いね。この地に来たのは間違ひないけど、一体何処にいるのかしら? ねえアロン、何かいい考えとかないの?」

彼女は一日中歩き回つたことの疲れで、溜め息をつきながら髪が振り乱れることも気にせずにとっかかりと尻をベッドへ落とす。同時に服の上からでもわかるくらい、豊かな乳房が踊るように何度も弾む。

目的であつたコロシラムには既にティリアの姿がない。行き詰つてしまい、今後どうするか具体的には何も思い浮かばない。彼のほうを見ると、椅子に座りごつい腕を組んで眉

間に皺を寄せて考え込んでいた。

「んー、そうですね。……いつそのこと、マリス様がコロシウムで闘うというのはどうですか？」

「えっ、私が闘うの？」

ビクッと背を伸ばして首を上げて驚く。

「そうですね。ティリア様がコロシウムで闘った後に行方知れずとなったとしますと、推測にしか過ぎませんが、やはりその関係者が怪しいのではないかと思われれます」

「……それもそうよね」

彼の言うことに何度も頷くマリス。

「コロシウムの外部でただ情報を集めるより、内部に入り込めば詳細が掴める可能性は高まります。もしかしますとティリア様を見つckerただけでなく、ここ的人身売買の件も聞けるかもしれません」

彼は姉姫を正面から見つめると、彼女は目を見開いた後眉に皺を寄せる。

「それは願ってもないことだわ。……でもこのまま出場したらみんなにバレバレじゃない？」

「それこそ好都合ではないですか？ 身分を隠すよりも、素のままに闘ったほうが得る情報も多いかと考えますが」

彼女は天井を見ながらしばらく唸りながら思考するが、長旅の疲れと淫夢による寝不足でも思いつかず意を決した。

「わかった、そうするわ。どうやらそれしかないようだし。でも闘うならその体格なんだから、アロンのほうが向いているんじゃないの？」

彼の太い腕つぶしをじっと見つめると、組んでいた腕を解いて摩さするアロン。

「いやいや、こう見えても見掛けだけなんですよ。私は情報収集が専門ですからな」

「ふーん、そうなの？ まあいいわ、じゃあ決まりね。私はコロシウムで闘うから、アロンは情報収集をお願いね」

彼がかしこまりましたと返事をした後部屋を出て行くと、彼女は上半身をどさつとベッドへ預ける。

アロンの前ではクールに装っていたが、闘うことを考えると気持ちちは弾んで興奮していた。だがすぐ妹のことが頭に浮かび、天井をじっと睨んで握り拳を作る。

（テイリア、無事でいてね）

マリスはそのままベッドに入って目を閉じ、心に強く誓った。

次の日。マリスはコロシウムの受付へ行き、登録を済ませてルールの説明を聞いていた。「……以上がコロシウムのルールであります、本当によろしいのですか？」

姉姫の普段見られぬ格好を眺めているティリアは身体をくねらし、囲まれている男共にボンデージを脱がされながら好きなように触られている。マリスと同様に肢体を撫でられ、手に零れんばかりの豊満な乳房をされるがままに採まれ喘いでいた。

「ああつ、ティ、ティリアまでも……」

（な、何とかティリアを助け出さないと……で、でも……）

「んふ、気持ちいいかしら、姉様？」

「こ、こんなのつ、き、気持ちいいわけつ、……んんつ、ないっ」

マリスに纏わりつく男達の手は未だ止まらず、唇を歪めて耐えている。

「んうつ、そ、そうかしら？ 私は、凄くイイの。姉様からの感覚がこっちにもピンピンきているわあつ」

「……え？」

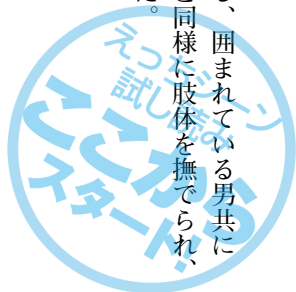
「わかってるでしょう？ 私達の感覚が繋がっていることを」

姉が沢山の手に身体を弄られている感覚が、妹にも伝わっていると云われて思い返す。

「感覚だけでなく、夢を見るとときも同じものを見てるじゃない」

「夢の中……ああっ！」

彼女は夜な夜な魔された淫らな夢のことが頭の中に浮かび上がり、顔が熱くなるのを感じていく。





(やっぱりあの夢は、ティリアがエッチなことをされていたんだ……)

「姉様の夢の中にも出てきたでしょう？ あちこち身体を触られて悶える姿を。あれ、私なんだよ」

「ああっ、そんな、ティリ…アっ、はうっ、……んくっ、ふううううんっ！」

今妹が受けているマッサージと夢で見た光景が重なると、マリスの肌は接触感を受けたかのように熱くなって、自分自身が揉みまくられているような感覚に全身が熱を帯びていった。

無数の男達の手は姉の下半身に群がり、白の下着の上から少し盛り上がっている丘を撫でられ、尻の割れ目に何本もの指を食い込ませていく。

「うう、……や、やめなさいっ、あなた達っ！ こっ、こんなことしてっ、許さな……いんだからっ！」

無駄だとわかっけていても、柔らかな下腹部への接触に心地よくなりそうな自分に喝を入れるために大声を張り出す。それでも彼等は口角を上げ笑いながら、脚の付け根から一層隆起した丘へ目指して指を這わせていった。

「だ、ダメっ、そこはダメなのっ！」

敏感な部分に指が近づくにつれて彼女の腰はピクピクと震え始め、意識なく吐息を漏らしてしまふ。

「はあつ、もうやめてつ、こ、これ以上はダメなのっ！ んうくつ、ううう……」

だが群がる指は容赦なく布の上から浮かぶ丘の中心へと辿り着き、その筋をゆっくり上下に擦られていく。

「あうううつ、いやつ、いやあああああつ！」

何度と首を横に振って、下半身で行われていることを拒絶したくてもできない。腰だけでなく全ての肉体へピリッと電気が走っていった。同時に身体が火照り始め、沸々と汗が湧いてくる。

「はあつ、うう、んうつ、……ああ、いやあ……」

丘の中心地点を擦られる度に、マリスは微弱な電気に痺れそうになった。

「んん？ 何だ、指が湿ってきているぞ」

筋を弄っていた男がふと気付く。

「擦れば擦るほど、指に汁が纏わりついてくるし、クリトリスもコリコリになっているぜっ！」

彼女に見せるように彼は手を目の前に出すと、人差し指には少し泡立った牝蜜がドロドロに垂れている。

「おいおい、大勢が見ている人前でこんなに汁を垂れ流して、クリも硬くさせるなんて、アルシアの姉姫はよっぱどの欲求不満なのかあ？」

「なっ、そ……そんな、こっ、と……」

ハツとして辺りを見渡し、いくつものいやらしく笑う観客達の顔がマリスの目に飛び込む。

「い、いやああああああっ、もっ、もう離してええええええええっ！」

姉は臉を強く閉じ、頬を紅潮させながら絶叫した。

他の男達も、「本当だ」「淫乱なお姫様だなあ、ひひひ」と彼女を<sup>なぶ</sup>眺つては下品に笑い合う。

「お願い、もう見ないでっ！」

瞳に涙を溜め口をへの字にして耐えるが、近くにいた男共や観衆の視線が自分の恥ずかしい部分に集中していると思うと、鼓動が早くなってさらに下着にシミを作っていく。

「おっ、マリス様、もつと汁を吹いてるぜ」

「こりゃあマリス様は見られて悦ぶ露出の気があるかもな」

「そんなのっ、なっ、ないっ！」

すぐに否定をするが、ティリアはゆっくり姉の正面から近づいてきた。

「うふっ、姉様つたらはしたないわね。でも姉様の感覚が私にも伝わって、すごく感じちやった」

「……ティ、ティリア、んんっ、ど、どういうこと？」

いぶしかげに顔を曇らせて妹を見る。

尿道口を弄られた瞬間、ジンジンとして臉を強く瞑り奥歯に力を籠めるが、口の端からも唾液が零れていく。

「痛い？ そんなことないでしょう。ここからどんどん溢れてくるわよ」  
姉の反応を楽しみながら微笑する女ボスは、目を輝かせながらも一度手を止める。

（あ……、やっと終わった……）

ドクン！ ドクン！ ドクン！ ドクン！

（え？ ……あつ、熱いつ！ な、何もされてないのに……どうしてえ？）

ほっとするのも束の間、赤い鉾先はジンジンと熱を持ち脈を打って腰を蠢かしていた。

「あら、どうしたの？ そんなに腰を振っちゃって」

「そんなことっ、ないわ……よ」

顔はそっぽを向くが肉竿はビクビク揺れ、呼吸が荒くなり脂汗が噴き出す。

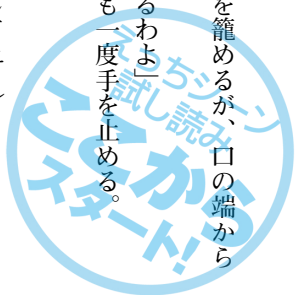
「やっぱりティリアの言う通り素直じゃないのね。でも今回はその可愛さに特別なことをしてあげるわ」

「……特別？ んひやつ、あつ、あつうっ！」

カミラはまた竿を握り直すと、姉はまたビクンツと身体を弾ませる。

（また……同じことをしようというの？ で、でも今度こそ、……たっ、耐えて……）

決意を固めるが女ボスは握ったまま扱わず、顔を肉棒のほうへ近づけてきた。



「な、何をするの？」

「ふふ、もっと気持ちよくしてあげるわ」

不安に彼女を見守っていると、唇を舐め回して大きく口を開け、赤く染まった亀頭を包み込む。

「あつ、あつつ！ やつ、やめつ、はううううつつ！」

「んむ、んぶつ、はむ、ん。……どう、これでも気持ちよくないっていうの？ はむつ」

「こ、こんなのつ、んあつ、あひいいいんっ！」

彼女は口に頬張るだけでなく、亀頭へ舌を絡ませる。それだけでマリスは呻き、悦楽に耐えようと身体を硬直させていく。

「れるれろ、んふ、んん、じゆるん……」

カミラは口内で肉鉾を舐め続けると、鉾先からはなおも淫液を吹き出していた。

「んふ……、凄いいちんぽね。まだまだカウパーが溢れてくるわ」

口を離して唾液と混ざった汁が棒を包むと、彼女は竿沿いに舌を這わせて混合液を舐め取る。

「ぴちよぴちよ、れろれろ……、はむはむう、んぶつ、れう……」

「ひゃつ、やめつ、ううつ、はあつくううつつ！」

そしてまた女ボスは肉鉾を内包すると、姉姪は抵抗する言葉が出なくなってしまう。

(あつ、……アソコがあつたかくて溶けてしまいそう……)

そのまま彼女は顔を沈めて竿ごと飲み込むが、半分も行かずに目を見開いて眉を顰めてすぐに引いていく。

「んぐっ？ んん……ぷあつ。すつごいわ、あなたのおちんぼ。もの凄くぶつといから全部啜えきれないけど、おいしいわあ」

カミラは口から涎を垂らしながらうつとりと微笑み、また肉棒を飲み込んでいった。

「あつ、うぐっ、はううううんっ！」

口が離れたときマリスはほつとしていたが、再び始めると口をへの字にして呻いていく。今度は喉奥まで届いても止まらず、ただ進むだけでなく戻ったりと繰り返し、それを淫らにゆっくりと水音をたてていく。

「んむっんむっ、んぶ、んぶ、ぷぶっ、ぶむっ、んぐ……」

リズムよく女ボスは顔をピストンのように上下運動をすると、姉は今まで体感したことなかった新たな快感に鼓動を早くさせていた。

(なっ、何、この感覚？ クリトリスより敏感で……口に包まれると……あ、熱くて心地よくなっちゃううううううっ！)

そんな心情をわかっているのか、彼女は何度もピストン運動を続けるだけでなく、一度口を離して舌を盛り上がっている肉竿の頭を攻める。

「れるっ、れろれろれるっ、れえーえっ」

「ひゃっ、あうううううううっ！ ううっ、……くううんっ！」

唾液で潤った舌はピンクの亀頭の周辺を舐め回すと、姉はくすぐったいような感覚に腰を引いても逃れることができない。そのまま止まらずに先が割れた窪みへ舌を細かく動かしていく。

「れるれるれるれるるっ、れえん……」

「ううっ、ふううううううううっ！ そっ、それっ、……だっ、めっ……ええ」

（こっ、こんなことずつと続けられたら……く、おかしくなっちゃうううううっ）

尿道を穿<sup>ほじ</sup>られて口を歪めて震え、肉棒の快楽に耐える表情の変化を上目遣い喜んでいるカミラ。

「うふふふ、どう？ ココを責められて」

「ああっ、ん……はあ、はあ、……はうううっ……」

「あら、答えられないほど気持ちいいのね。じゃあもつと気持ちよくしてあげるわ」

口の端っこから透明な雫を零しながら微笑んだ後、汁だらけにコーティングされたピンクの頭に口付けた。姉はまた熱いものを感じ、興奮が増して吐息が荒くなってくる。

唇はまた頭を包み込むと、そのものを空気ごと一緒に吸い込んでいく。

「ぶぶっ、ぶぶっ、ぶぶうううううっ！ ……ぶぐ、んぶぶぶうううううううっ！」





ず、脳内まで痺れて反抗することを忘れていた。

「腰をこんな振っちゃって。もっとしてほしいのね？ それなら一気にいきますわよ、マリス様」

目を閉じて両腕両脚に力を籠めている姉姫を見てにやけるカミラは、また擬似肉棒にダブルの攻撃を仕掛ける。今度は喉口より深く、手をスピードアップさせていく。

「あああああつ、あぐつ、……ああつ、あふうつ、はうおおおおおつ！」

肉鉾が温かな喉肉に圧迫され削がれる感覚と、指で付け根を絞められ扱かれる肉感に、姉は無意識に愉悅の声を漏らしていた。

同時に鉾の先からは、今までより多くのカウパー液を吹き出して女ボスの口内や竿を潤していく。

グチュグチュ、グチュグチュ、ブジュブジュ、ジュブジュブ、ジュブウウウ——

泡立った混合汁は内太腿から尻まで満たし、水音が姉の耳にまで轟いてくる。

(あああつ、何か……アレの奥から熱いのが込み上げて……)

それと共に肉棒がブルブルつと震えると、女ボスはすぐそれを感じ取ってあることに気がついた。

「……んん？ まあつ、何もしてないのにココからも汁が垂れているわ。こっちも寂しいようだから弄ってあげる」

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**